



高松三笠両宮家より供花賜る

第45回

特攻観音年次法要

平成8年9月23日  
世田谷山観音寺

会報  
**特攻**  
平成8年11月  
第29号

〒105 東京都港区虎ノ門 3-6-8 第6森ビル 財団法人 特攻隊 戦没者慰霊平和祈念協会 電話 03(3432)1090	
編集人	田中賢一
発行人	木村元正

台風一過秋晴れの好天に恵まれ、遺族、来賓、会員併せて四百余名参集の裡、厳肅に行われた。太田賢照住職の山主願文に続いて、奉賛会瀬島龍三会長、遺族代表八絃隊林健太郎の弟林聖二及び戦友代表特操三期和田実の追悼の辞と続いた。

恒例の献吟及び海軍軍装会の儀仗参拜のあと長い焼香の列が続いた。しかしその列は老人集団である。我々の抱く散華した戦友に対する申訳ないという気持は尽きることはない。だが英霊は申されるであらう。我々は何の為に死んだのか、しかと後世に伝えよと。

当日の献吟にいう、

第四三三振武隊 若尾達夫

身はたとえ 愛機と共に砕くとも

魂 永久に国ぞ護らん

今日の我が国はこの気持が全く失われてしまった。慰霊法要もさることながら、生き残った者の使命はこの精神を確かと次の代に植えつけることにある。

祭文や追悼の辞にもその気持は溢れていた。それらの一端を引用すれば、(祭主祭文) 過ぎ去りました歴史は私達残された者にとって、誠に厳しいものでございましたが、昨今若い人々のうちに真実の歴史を求め、皆様が散華された時の至誠至純の思いを学ぼうとする一筋の流れが出現しております。ことは、心強い限りと考えます。この若い人々に後事を托することに、今日より努力重ねることを、ここにお誓い申あげます。

(遺族代表追悼の辞) この英霊のお姿をそしてその精神を、私達の時代だけではなく今後の若い世代によく話をし、引継がせていくことが、私達の使命であると痛感いたします。

(戦友代表追悼の辞) 現世に生き残りました我々戦友も、戦後それぞれの道を歩みながら、常に皆様への鎮魂と敬慕の念をもって今日まで参りましたが、今こそ特別攻撃隊として親愛なる家族と決別して、祖国の危急に自ら進んで散華されたご英霊の精神を、的確に伝え現代日本人の精神の作興を計らなければなりません。戦後に生を享けた人の中にも、自ら求めて皆様の偉業を学習し、感謝をもって語り部とならうと努力している人があります。我々はそれを育ててゆかなければなりません。

目次

特攻観音年次法要……………1  
 特攻観音の由来……………3  
 靖國神社みたま祭……………4  
 八月十五日の靖國神社……………5  
 B-29基地マリアナに対する  
 陸海軍の経空攻撃③……………8  
 「知覧特攻基地」より①……………14  
 B-29に対する体当り①……………18  
 敵大型爆撃機に零戦の体当り……………26  
 高野山空挺墓前祭……………17  
 宝塚聖天慰霊祭……………28  
 原町飛行場慰霊祭……………28



焼香の長い列

### 会場における絵画展

我が会の画伯達は英霊に因む油絵を事あるごとに靖國神社の参道に展示していることは、本紙6頁にも紹介してあるが、特攻観音の年次法要にも毎回観音寺本堂の欄干を借りて展示している。

今回は市川国雄、伊藤直之、松本武仁の三氏が合計四〇点ほど出品した。ここに最近画かれた主なもの各人一点を紹介するが、この絵画展が継続して行われるのは松本武仁氏の熱意に負うところが大きい。



観音寺本堂



ミッドウェー海戦飛龍艦上における  
山口提督と加来艦長 (市川国雄画)



第 69 振 武 隊 (伊藤直之画)



藤井一中尉の幻影 (松本武仁画)

↑第69振武隊20・4・12知覧発進、沖縄近海の敵艦に突入。池田亨少尉、岡安明少尉、柳生諭少尉、持木恒二少尉。このほか本島桂一少尉は16日突入。  
←第45振武隊藤井一中尉は熊谷飛行学校で少年飛行兵の中隊長をしていて、教え子を特攻に行かせ自分だけ生きてはおれないと特攻を志願した。夫の堅い決意を知った妻は、お先に行って待ちますとの遺書を残し二人の幼子を伴い荒川に身を投じて果てた。藤井中尉以下十人は20・5・28知覧出撃、沖縄近海の敵艦に突入。

## 特攻平和観音の由来

このことに就いては昭和58年9月発行の「特攻会報」第1号に掲載し会員にお知らせしたが、その後会員になられた方もあり、往時のことを知ってもらいたく当時の文面そのままを転記する。

大東亜戦争の末期、戦局にわかに急迫しわが祖国は存亡の危機に立ち至りました。この国難を打開し、戦勢を挽回するため異常の決意をもって敢行されたのが航空機ならびに舟艇等による必死必殺の特別攻撃でありました。若冠二十代、中には二十歳にも満たない多くの若人が、春秋に富む清纯無垢の身をひたすら祖国に捧げ、決然として体当たり攻撃を敢行し、散華されたのであります。

この陸海軍特別攻撃隊烈士の不滅の英霊を大慈大悲の平和観音像に顕現して、その忠烈な偉業を顕彰し、永遠のご冥福をお祈りし、又その慈光を拝するため、元海軍大将及川古志郎、同高橋三吉、元陸軍大将河辺正三、元陸軍中将菅原道大、元海軍中将寺岡謹平等

の諸氏が発起人となり有志の方々に喜捨を仰ぎ、昭和二十七年春、平和観音像は造立されました。同年五月五日音羽の護国寺に於て、東久邇元宮様ご臨席のもとに開眼の供養が荘厳盛大に挙行せられ、特攻平和観音と敬称することとなりました。この観音像は大和法隆寺の夢殿に奉安してある秘仏「夢ちがい観音像」を特別のお許しを受けて謹鑄されました一尺八寸の金銅像で、そのご胎内には特攻隊烈士の英名を書き入れた巻物が奉藏されております。

この開眼供養のお言葉に「恭しく惟るに国家興隆の義は山嶽よりも重く、平和礎石の死は鴻毛の軽きに比し、必死必中の壮挙誠に帰するが如き純真無垢の慈顔は、これ特別攻撃隊員最後の英姿なり。ここに同志平和観音像造立の意に賛し、相寄って尊形を大慈大悲の観世音菩薩と化し、英霊を安んぜんことを劃す。それ菩薩の真身は想い難し、故に形像を造刻し、これに托してもって真仏に通ぜしむることを致す。今尊像の造立成り、具さに嚴飾を極む。毫光燦として輝き、相好宛然たり。寄って恭しく開眼の法を修す。」とあります。

特攻平和観音は護国寺境内の忠霊堂内に安置されておりましたが、お世話をしておられた白蓮社の解散に伴い、

特攻平和観音をお守りする者がなくなりました。有志の方々が寛永寺其他のお寺に交渉しましたが、当時の情勢では、どこも受入れてくれませんでした。

元海軍中将清水光美氏よりこの話を聞かれた世田谷山観音寺の開祖太田陸賢大僧正はいたく感動され、観音寺の本堂に奉安されました。これはいつに陸賢大僧正のご厚志と大英断によるものと申せます。陸賢大僧正は特攻観音独自の堂宇建立の悲願にもえ、元華頂宮家遺愛の持念仏堂を山内に移築する運びになりましたが、その完成を見ずに昭和三十年五月二十四日に遷化されました。後継者となられたご子息の賢照師が開山の意を体して特攻観音堂を完成せられ、昭和三十一年五月十八日落慶法要を厳修し、特攻平和観音を遷座されました。

最初の特攻平和観音は、陸海軍航空特攻烈士のみを顕彰するものとされておりましたが、昭和三十一年五月十八日、ついで三十三年同月同日、更に五十二年九月二十三日の大祭に於て、水中、水上各種舟艇特攻の烈士を追加合祀せられ、現在約五千に及ぶ特攻烈士の英名が、特攻平和観音像のご胎内に奉藏されております。

境内の池の中にお立ちの観音像は、特攻平和観音像と同形の仏像で、昭和

四十八年九月二十三日に開眼法要が営なれました。

特攻平和観音奉賛会は、昭和二十八年有志によって創設せられ、昭和二十八年拡大されて遺族・有志が一体となった組織となり、昭和五十七年再組織を完了、引続き竹田恒徳元宮様を会長として奉仕しております。事務所は世田谷山観音寺に置いております。毎月十八日午後二時より月例法要を執行し遺族、有志が賢照師と共にお経を唱和して供養しております。又毎年秋分の日(多くの場合九月二十三日)午後二時より浅草寺一山式衆のもと多数の参拝者をいただき、年次法要が厳修されております。年次法要には、毎回東久邇元宮様が参拝されておりました。又昭和三十三年六月九日には北白川元大妃殿下もご参拝になり、特攻隊烈士の御歌二首を奉獻されました。

昭和五十八年九月

特攻平和観音奉賛会



特攻の英霊に  
捧げる

# 盛夏の靖国神社二題

平成元年 7月13日(土)・14日(日)・15日(月)・16日



## 靖国神社みたま祭

### その起源と現況

終戦の年の11月20日、政府は靖国神社臨時大祭を行い、天皇陛下の行幸を仰ぎ英霊に対し戦火の終熄を報告し、併せて未合祀戦死者の合祀手続きを速に行うことを期した。ところがそれから一ヶ月もたたぬ時に、占領軍から所謂「神道指令」なるものが発せられ、

靖国神社は国の手から離れ一宗教法人にさせられ、天皇陛下の御親拝も不可能となった。「神道指令」など独立回復と共に消滅したのに、未だにその呪縛を脱し得ないのはどうしたことか。それはさて置き、翌21年7月、陛下の行幸が仰げず、政府も為すところないならば自分達だけでやろうと、長野県遺族会有志の人々が上京し、境内で盆踊りを繰広げみたまをお慰めした。

これを契機として翌22年から神社主催で現在のような「みたま祭り」が行はれるようになった。

この行事は新暦の盂蘭盆に因んで7月13日から16日の間行はれ、折しも梅雨明けの頃で納涼をかねて大変な人出である。今年も部隊戦友会、軍諸学校の同期生会、会社や個人有志などの献納した大型提灯が約八、八〇〇個、個人の小型提灯が約一六、〇〇〇個、各界名士の書いた雪洞(ぼんぼり)約四〇〇個が飾られ、みたまをお慰めする盆踊り、みこし振りなど郷土色豊かな催しが行はれた。

「英霊も輪に入り給え盆踊り」



小型提灯



ぼん踊り



ぼんぼり

# 八月十五日の靖国神社



( 5 )  
当日の参拝者は延約九万人に及んだ。正午には社前に溢れた人々が時報を合図に一齐に黙禱を捧げ、ついで武道館の追悼式における天皇陛下のお言葉の放送を拝聴した。

## 英霊にこたえる会主催 第21回全国戦没者慰霊大祭

堀江正夫会長の捧げた祭文の一節

先帝陛下は「戦陣ニ死シ職域ニ殉ジ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内為ニ裂ク」と宣わせられ、さらに戦後の再建について「任重クシテ道遠キヲ念ヒ総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ国体ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レザムコトヲ期スベシ」とお諭しになられております。

しかし、私共は果してこれにお応えしているでしょうか。物質的繁栄の裡にあって、精神的退廃は目に余るものがあると御報告を致すことには、後に続き御英霊の御意志を継ぐべき私共と致しまして、誠に慙愧にたえないところであります。特に細川発言をはじめとする一連の自虐的謝罪史観の愚行が、国政の場で論じられていることは、英霊が殉じられた祖国日本を犯罪国家と自認する売国的行為であり、それはまた、英霊を冒瀆する何ものでもありません。

しかしながら、この現実を座視するにしのびず、学問的立場から正しい史観を検証する運動が巾広く抬頭してきていることは喜ばしい限りであります。

私共は本年をわが国の再生元年と位置付け、今後にもあっても御霊の尊い殉国の御心と、正しい史観を次代に継承いたす国民運動を推進することをお誓い申し上げ、ここに本年もまた、先帝陛下が昭和六十一年八月十五日にお詠みになられた御製を奉唱して祭文といたします。

この年の この日にもまた 靖国の  
みやしろのことに うれひはふかし



参列者は約800名拝殿一杯になった

我が会の画伯達（伊藤直之、市川国雄、松本武仁の三氏）は、今回もまた御祭神に因む油絵三十数点を参道に展示し、参拝者に多大の感銘を与えた。



英霊にこたえる会と日本を守る国民会議の共催によるこの催しも本年度第10回目となる。参道に建てた大天幕内500の椅子は満席で天幕の両側に立っていた人も含めると延1,500人の聴衆があった。

集會行事は国学院大学大原康男教授の司会で行はれ、国歌斉唱靖国神社拝礼に続いて終戦の詔書玉音放送の録音を拝聴し、一言一句に我々をお諭しになった大御心を更めて俤んだ。

主催者代表の挨拶は英霊にこたえる会の堀江正夫会長と、日本を守る国民会議の小田村四郎代表委員の両者で行はれた。堀江会長は「靖国神社の参拝は単にその死を悼みこれを慰めるだけのものではない、一死もって国に殉じたその戦についての正しい認識をもってする参拝でなければ真の参拝にあらず」と、大東亜戦争に対する世上の誤った認識を戒められた。

ついで小田村代表は八月十五日は一億国民が終戦の詔書を拝聴した日であり、その詔書が戦後の我々の出発点だった。昭和天皇は「堪へ難

キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍へ」とお諭しになったが、そのお諭しを今の日本人は忘れてしまったのではないか。連合軍の占領政策は苛烈を極め、特に苛酷な言論弾圧があった。その占領政策が逐次に国民の間に浸透し、東京裁判史観に汚染されていったと、細川発言や教科書問題を挙げて政権の座に在った者の自虐謝罪姿勢を激しく糾弾した。そして特攻作戦を含む、陸海軍の勇戦奮闘にも拘らず武運拙く敗れたのであって、絶対に間違った戦争をしたのではないと強調された。

主催者側の挨拶が済むと各界代表三人の提言があった。

衆議院西村眞悟議員は、「我が国には政治はないと切り出した。政治の目的は民族の存続と繁栄を慮ることであるのに、国家の為に命を捧げられた方々に対し礼儀を尽くしていない政治は、政治ではないのだと説いた。このようなことでは外交も成り立たぬ、外国元首が靖国神社に参拝しないということが、その証拠である。日本の首相が訪米したときアーリントン墓地に参拝するように、来日したならば必ず靖国神社に参拝しなければ、我が国に礼を失するのだ」ということを、外務省の役人に言うのではなく、世論によって動く外国の元首に訴えようではないかと提言した。

JET日本語学校金美齡校長（台湾）は終戦時小学校六年生だったが、軍のトラックに乗せてもらい親切に扱われたことも先ず述べ、靖国神社に祭られている何も言はぬ英霊にすべての



## 終戦の詔書

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ収拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言を受諾スル旨通告セシメタリ

抑抑帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ借ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二國ニ宣戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ交戰已ニ四歳ヲ閱シ朕カ陸海將兵ノ勇戰朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各各最善ヲ盡セルニ拘ラス戰局必スシモ好轉セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所眞ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ交戰ヲ繼續セムカ終ニ我が民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤字ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内爲ニ裂ク且戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ乱リ爲ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宣シク擧國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシテ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名御璽

昭和二十年八月十四日

責任をなすりつける卑劣さ卑怯さを痛烈に批判した。そして現在の台湾と中国との関係について、台湾はかつて日本の同胞であったにも拘らず、対岸の火災視し無関心である日本の態度を非難し、台湾の安全を案ずることは日本の国益に大切なことだと訴えた。

最後に長崎の原爆展示をただす会の西淳代表が立った。長崎原爆資料館の加害コーナー阻止運動を続けている西氏は、運動の経過と成果を報告すると共に、まだまだ改善を要する点があるので皆さんの協賛を得たいという話だった。全国から修学旅行団体の見学があるという。教科書が偏向している現在、せめてこの種の資料館だけでも正しい歴史を伝えるようにしなければならぬと、聴衆一同つくづく思った。

このあと正午に合はせて黙禱、政府主催の式典での「天皇陛下の御言葉を拝聴、声明文の採択のあと「海行かば」を斉唱し閉会した。

当日採択した声明文の要点は次の通り、

先の大戦をめぐる歴史観や靖国神社にかかわる問題がなお混乱している我が国の現状を眺めるにつけ、本集会の意義の重要なことを一層痛感する。

たとえば、本年四月、長崎市に新たに開設された原爆資料館には、およそ原爆とは関係のない、日本の「加害と侵略」の歴史を殊更に強調する歴史展示コーナーが設け

られたために、全国から見学を訪れる児童・生徒たちの心に、「日本は戦争で悪いことをしたのだから、原爆の投下はしかたがない」という「原爆容認論」を植えつけかねない由々しき事態が生じている。

また、来春から全国の中学校で使用されるすべての歴史教科書には、いわゆる「従軍慰安婦」についての記述が新たに追加されるなど、一段と、反日的・自虐的色彩の濃い内容になっており、かかる教科書でこの国の歴史を学ぶ子供たちのことを考えると、その将来に暗澹たる思いを禁じ得ない。振り返れば、本年は、勝者が敗者を一方的に裁いたあの東京裁判が開廷されてから五十年目に当たる。いわゆる東京裁判史観の論理は半世紀を経てもなお強固な呪縛力を有しており、明白な国際法違反である無差別大量殺戮を犯した原爆を不問に付す一方、我が国の行為のみを「侵略」として糾弾するという、実に不当きわまりない歴史観がこの国をいまだに彷徨している。(中略)

大東亜戦争の真実を明らかにし、東京裁判史観からの脱却をはかるためさらなる国民運動を推進していくとともに、我々はこの熱き思いを次代を担う若い世代に継承させ、近き将来、我が国が真に自主・独立の歴史観を確立し、もって二五〇万英霊のみたまを安んずることのできる日までこの闘いを継承することをここに決意する。

# マリアナB-29の基地に 対する陸海軍の経空攻撃

## 〔海軍航空〕

先ず戦史叢書本土方面海軍作戦に掲載されているものを転記する。

10月28日、大本宮陸軍部は、教導航空軍を防衛総司令官の指揮下に入れてマリアナの米航空基地を攻撃させることに決し、硫黄島における作戦準備を進めた。海軍ではトラックに対するB-29の第三回目の空襲が行われた11月2日夜、陸攻隊をもってサイパンの米航空基地を攻撃することとなった。

11月2日〇五三〇、陸軍教導航空軍の百式司偵三機が硫黄島を発進してマリアナ偵察に向かったが、密雲にはばまれて目的を達しなかった。

T攻撃部隊攻撃七〇三飛行隊の一式陸攻一〇機は同日夕刻硫黄島に進出、二〇五〇ごろ同島を発進してマリアナ攻撃の途に就いたが、うち八機が夜戦多数の邀撃にあいながら各基地の襲撃に成功している。この攻撃中に陸攻一機が撃墜され、他に二機が帰投中に失

われた。

### ③

聯合艦隊は11月4日、T攻撃部隊（指揮官 七二六海軍航空隊司令 久野修三 大佐）に対し、マリ

アナ方面に増強されつつあったB-29の偵察、攻撃に関し次のとおり下令した。

聯合艦隊電令作第三九八号

（四日一〇三四）

一 T攻撃部隊指揮官ハ当分ノ間陸上攻撃機八機ヲ木更津基地ニ派遣第七基地航空部隊指揮官ノ指揮ヲ受ケシムベシ

二 第七基地航空部隊指揮官ハ麾下兵力並ニ右増援兵力ヲ以テ機宜「マリアナ」方面ヲ偵察攻撃シ主トシテB-29ノ撃滅ニ任ズベシ

11月6日早朝局地偵察のため硫黄島を発進した偵察機のうち、ガムに向かった一三一空偵察一二飛行隊の彩雲は天候不良のため途中から引返したが、陸軍教導航空軍の百式司偵が一〇六帰着してサイパン、テナンの状況を次のとおり報告した。

一 目標附近雲量 五〜六  
二 「アスリート」 大型機約四〇

（掩体中）

「オレアイ」 小型及中型機三

〇〜四〇

「チャチャ」 小型機数十機

三 「テナン」 小型機多数 其

ノ他雲ノ為偵察不能

「サイパン」 港内巡洋艦数十隻

一六二〇ころ攻七〇三の一式陸攻七

機、陸軍教導航空軍の重爆五機、百式司偵六機が硫黄島に到着、攻撃準備のうえ二〇一〇から翌7日〇〇三〇の間に発進して、マリアナ攻撃に向かった。

この日少なくとも陸攻五機がテナン及びサイパンの米基地を攻撃しているが、夜戦多数の邀撃にあつて戦果を確認していない。攻撃から帰還した各機は同日一式陸攻は木更津へ、重爆、百式司偵はそれぞれ浜松と八街（千葉県）に帰着した。

このあと偵一二の彩雲によるガム（17日）及びサイパン（23日）に対する偵察が続けられ、写真及び目視による偵察の結果ガム島に多数の大型機が所在するのを確認したが、サイパン島の状況は天候不良あるいは航空機故障のためつかめなかった。

注 偵一二は11月15日付で一三一空から除かれ、七五二空に編入された。

このような状況のもとにB-29の撃

滅を命ぜられていた三航艦では、これまでの陸攻による攻撃にあきたらず、戦闘機隊の銃撃による強襲を11月16日ころから計画し、館山基地においてこの攻撃に参加する戦闘機隊（第一御盾特別攻撃隊）の挺身攻撃訓練を実施していた。

11月26日、第一御盾特別攻撃隊の零戦一二機及び七五二空の彩雲二機が硫黄島に進出して、翌27日〇八〇〇同島を発進サイパン攻撃に向かった。この日サイパンからは八一機のB-29が二回目の東京爆撃に発進しているが、基地にはなお多数のB-29が残されており、戦闘機隊は正午過ぎから米飛行場を襲撃したものと思われるが、攻撃に参加した戦闘機は全機帰還していないのでその状況は不明である。しかしながら不意の強襲によってアスリート飛行場が混乱している状況は、米側電話の傍受によって判明した。我が攻撃隊は極く低高度で飛行場に進入して、B-29に対して繰返し銃撃を加えており、飛行場にあったB-29四機が破壊され六機が大破した。

また前夜おそく硫黄島を発進した陸軍の四式重三機は、27日〇〇七〜〇〇一〇の間アスリート飛行場南半部に對する奇襲に成功した。

11月28日には、ガム島攻撃を予定



して同日硫黄島に進出した攻七〇四の一式陸攻一二機をもって、サイパン第一飛行場所在のB-29を攻撃することとなった。これらの陸攻は目標到達の約一時間前から、単機で進撃して緩降下接敵、水平爆撃を試み、〇〇二〇から〇二〇五の間に飛行場及び艦艇を攻撃した。

このころ、米機が電波兵器を使用して夜間または雲上からの爆撃も可能であることが明らかとなったので、その対策としても米機の本土爆撃能力をマリアナの基地において減殺することがさらに焦眉の課題とされるようになった。

12月6日二二四五硫黄島を発進した攻七〇四の一式陸攻六機が、翌7日〇三三〇から〇四〇〇の間アスリート飛行場を攻撃して誘導路地区に火災を発生させているが、我が方も陸攻二機を失った。このころ陸軍の四式重爆八機も同飛行場を攻撃している。

これらの航空基地に対する攻撃は、少数機の奇襲であったから米軍に与えた物的な損害は大きくはなかったが、米軍の士気に対してはかなり深刻な影響があったもようである。その後間もなく米爆撃隊は海軍艦艇と協同して硫黄島攻撃を行うこととなった。

このあと12月25日及び26日にも銀河

及び重爆数機によるアスリート飛行場攻撃が行われているが、その成果を期待することはできなかった。

以上記録されている通り、通常の航空攻撃においても生還を期し得ないことと特攻隊と変りないが、第一御楯攻撃隊は純然たる特攻隊である。当時誘導に任じた彩雲の搭乗員二名が戦後取りまとめた記録があるので、その全部を転記する。

### 第一御楯特別攻撃隊の記録

(防衛研究所戦史部保管)

#### 1. はしがき

この記録は昭和19年11月27日、サイパン島アスリート飛行場在地のB-29群を強襲、銃撃による破壊炎上を企図し、硫黄島基地を発進した二五二空戦闘三一七飛行隊の「零戦」一二機と、その誘導及び戦果偵察の任務を帯びて同行した七五二空偵察一二飛行隊の「彩雲」二機の物語りである。

この作戦で零戦隊一二名中一一名が戦死し、一名は攻撃前の故障でパガン島に不時着、彩雲隊二番機(三名)は消息不明、彩雲隊一番機のみ硫黄島に帰着した。

当時は、フィリピン方面に於て特攻攻撃が開始されてから約一ヶ月を経て

いたが、この零戦隊は出撃の時点では特攻隊として編成されず、従って特攻隊としての名稱もなかった。しかし二週間後の19年12月10日、戦死した一一名は連合艦隊告示第七十五号によって第一御楯特別攻撃隊として全軍に布告、翌20年1月下旬新聞に公表された。

彩雲隊一番機の機長・南魏少尉(旧姓深瀬、乙飛三期)は翌20年戦死し、操縦員広瀬正吾飛曹長(操練四十七期)と電信員西村友雄上飛曹(甲飛八期)が現存している。

そして、昭和48年10月、予科練之碑保存顕彰会会報第十五号に、第一御楯特別攻撃隊の出撃直前の記念写真が掲載されたのを契機に、この作戦の経過を記録し、当日戦死された大村中尉以下十四士の御霊に捧げると同時に、ご遺族への報告とすべく、広瀬・西村の両名が記憶を辿り、防衛研究所戦史室の資料と同戦史室編集の戦史叢書(45)を参考にこの冊子を作製した。

しかし、残念なことには、戦史室資料に戦闘三一七飛行隊関係の資料が見当らず、偵察一二飛行隊の戦闘詳報及び両名の記憶による部分が多いため、記録の中心になるべき零戦隊の記述が少く、総体的に彩雲隊側よりみた記録になってしまったことである。

#### 2. 当時の戦況と作戦計画に至るまでの経過

大東亜戦争における日本の敗戦を決定的なものにしたのは、19年6月の「ア号作戦」の敗北・サイパン陥落であったが、その後間もなく、大本営海軍部は米軍がサイパンの航空基地を急速に整備し、B-29による日本本土大空襲を企図するものと予想し、その開始時期を19年12月早々と判断した。

その後、9月23日新鋭高速偵察機「彩雲」によるサイパン・テナン両島の高々度写真偵察によって、サイパン島アスリート飛行場の滑走路が大型機発着のため約三千米に延長中であることが確認され、10月28・30日にはトラック島に対しB-29十数機による爆撃が行われた。そして11月1日、B-29一機が初めて関東方面の写真偵察に飛来し、首都上空を悠々飛行した後南方海上に退去した。この時私達は木更津基地において、飛行場直上の高々度を四本の白糸を引きつつ北上する見たこともない大型機を、呆然と見送ったのが今だに忘れられない。かくてB-29の本土空襲は切迫しつつあったのである。かねてB-29の本土空襲を予想していた大本営海軍部は、レーダー及び本土南方洋上に配置する監視艦隊による早期発見と、防衛戦闘機隊による迎撃

態勢を整える一方、積極的にマリアナの発進基地にあるB-29を地上で撃破する陸海軍共同作戦を計画実施した。

即ち、11月2日・6日の両日、硫黄島を中継基地とした海軍の一式陸攻延一二機、陸軍の97式重爆延一二機・爆装司偵二機は折からの月明を利用して夜間爆撃を敢行した。しかしその結果は、攻撃による炎上を認めてもB-29の炎上であるか否かの戦果確認は不可能であった。

そこで、マリアナ攻撃を担当していた第三航空艦隊(三航艦)はこのような夜間攻撃では不徹底であると考え硫黄島から「零戦」で白晝強襲を敢行し、帰途は航統距離不足の関係上、サイパン島北方約三三〇kmのバガン島に着陸するという作戦計画が11月16日に立てられた。このため館山基地の二五二空戦闘三二七飛行隊の大村謙次中尉以下一二名の零戦決死攻撃隊が編成され、挺身攻撃の猛訓練が始められた。このような情勢のうち、11月24日、米軍はB-29約八〇機で東京初空襲(主目標、中島飛行機武蔵野発動機工場)を行った。そこでいよいよ右作戦を執行することになり、三航艦司令長官寺岡謹平中将は11月26日、一二機の零戦攻撃隊とその誘導・戦果偵察の任に当る七五二空偵察一二飛行隊の彩

雲二機と共に硫黄島に進出したのである。

### 3. 作戦経過

11月26日、硫黄島北部の半地下壕に集合した零戦隊一二名、彩雲隊六名計一八名の搭乗員は、航空参謀等数名指導の下に次のような作戦行動の打合せをした。

#### ① 零戦隊は27日〇八〇〇硫黄島を

進後、マリアナ諸島北部のアグリガン島まで彩雲一番機の誘導を受けそこで分離する。以後は米軍の電探を避けるため(特にアナタハン島には敵電探基地存在の見込み大と言われた)、マリアナ諸島の列島線に副つて、その東方を列島の頂上を視認する程度離れ、高度五〇米以下で南下、アスリート飛行場を急襲、在地のB-29を銃撃により炎上させる。攻撃予定時刻は一二二〇。

攻撃終了後は速かに北方に退避し、マリアナ諸島中部のバガン島飛行場に着陸する。同島には陸海軍合計約三千名が守備していて、生還搭乗員は12月中旬潜水艦によって救出する。

② 彩雲一番機は零戦隊の誘導機としてその前方を飛行、アグリガン島付近で零戦隊が分離後は、列島線の西方約一六〇kmを高度を上げつつ南

下、零戦隊の攻撃開始予定時刻の十分後アスリート飛行場上空に達し、高度一萬米以上で垂直連続写真撮影により零戦隊の戦果偵察を行う。偵察コースはテニヤン島南端より北上、サイパン島北端に達する直線コース

#### ③ 彩雲二番機(機長・操縦員江浪寅

六少尉)十三期予備学生、偵察員藤川高雄上飛曹、乙飛十六期、電信員洲上大四郎一飛曹(甲飛十一期)は途中まで零戦隊の後方を飛行し、一〇〇〇頃単独でバガン島に先行、同島部隊が使用する暗号書等を投下、以後は一番機と同じく戦果偵察行動に移る。

#### 思い出①

〔広瀬〕

11月26日の作戦打合せに参加して、航空参謀の作戦行動に関する指示によると、零戦は目的地到達後超低空から一気に高度三百米以上に上昇、そこから飛行場のB-29に対する急降下銃撃行動に移り、第一撃で必ず一機を炎上させること、引き起して上昇反転、炎上を確認出来なければ同機にもう一撃を加える。

一撃目で反転炎上を確認した際は第二撃目で次の一機を銃撃せよ。しかし

何れにせよ第三撃目は行なってはならない(これは対空砲火及び燃料消費等を考慮してのことと思われる)。

第二撃終了後は急ぎ飛行場を退避、次の目的地点(バガン島)に帰投不時着せよ。以後……

以上が打合せ時の零戦に対する命令のように記憶している。しかし打合せ終了後、零戦隊員が弾丸を撃ちつくすまで何撃でも銃撃を繰返すと話合っているのを聞いた。

〔西村〕

作戦打合せ終了後、参謀の一人が、傍の若い零戦隊員数名に、「バガンに戻るためには、零戦の燃料搭載量ではサイパン上空で五分間しか行動できないが(接敵行動中の超低空飛行では燃料消費が著しく増えるため)どうするか」と尋ねたところ、全員が何のためらいもなく「突込みます」と異口同音に答えたあの声は、三十年を経た今日でも私の耳に鮮やかに残っている。

11月27日早朝、硫黄島第二飛行場に集合した一八名の搭乗員は、寺岡長官の訓示と激励を受けた後、記念撮影を終ると直ちにそれぞれの乗機に搭乗した。〇八〇〇まず彩雲二機が第一飛行場を離陸、上空を緩やかに旋回する間に第二飛行場を発進した零戦隊がこれに合同、彩雲一番機を先頭に零戦一二

機の編隊、その後方に彩雲二番機が随伴するという隊形を組み、〇八一〇硫黄島を後に一路サイパン目指して進撃を開始した。進撃高度は三、二〇〇米であった。

思い出②

〔広瀬〕

高々度飛行と誘導飛行について

① 昭和18年12月、私は横須賀航空隊に着任直後から試作機彩雲の実用実験に従事、以後数回高々度飛行に参加したが、過給器を一速から二速に切替後、八千米から一万米迄の上昇方法がややもすると時間的に急ぎ勝ちになり、失速の恐れがある（これをやると急降下→空中分解の危険がある）。なお、この高度八千米付近の上昇飛行中は敵機に狙われる機会でもある。彩雲二番機が当日打電も出来ず未帰還になったことは恐らくこの何れかであると思う。

以前にもこの様な状況らしい未帰還が数回あり、当時私は偵察一二飛行隊の全操縦員に対し、「彩雲は六千米から一万米以上に達する迄は、操縦員・偵察員・電信員の三者一致して特に見張りに注意、敵機に発見される前に敵機を発見したならば、直ちに上昇を止め、水平全速飛行に

て一旦退避、三者安全を確認の上再度急速に上昇飛行に移らなければならぬ。勿論この間の燃料消費の計算には充分注意、燃料コックの切替えを間違つては（左右のタンクを平均に使用する）自滅の危険がある。上昇を急ぐ程機首を抑えるつもりで、即ち速力に余裕をもって上昇すること」……

以上の要点を特に講義したことを記憶している。

② 零戦を誘導するには零戦の巡航速度に合わせるため、彩雲は巡航速度一八〇ノット（三三〇km）なので四〇ノット近く速度を落さねばならぬ。このため離着陸用のスロット翼かフラップ翼を少々有効に使用して速度をコントロールしないと、自分で失速まではならずとも操縦がむづかしい、かと言って一番機はジグザク航法・操縦は許されない。

〔西村〕

誘導飛行中、機長南少尉と広瀬飛曹長の会話から、広瀬飛曹長が誘導速度保持に苦心している様子がはっきり感じられた。彩雲二番機は零戦の巡航速度に合わせるのが困難なため、その後方をゆっくり右に左にとジグザクに随伴していた。

開戦後二年位は敵戦闘機に対し絶対

優勢を誇り全戦域を制した零戦の性能も、この頃には優劣逆転しつつあり、日本海軍の栄光の翼をこのような決死的作戦に使用せざるを得なくなった戦局を思うと感無量であった。しかも、一応の帰還計画はあっても、零戦隊全員が全く生還を期せず決死の覚悟であることを知っていたので、飛行中後続の零戦隊を見守るように後方に向いた電信席に坐っている私は、その悲壮な雄姿を永久に瞳に焼きつけておこうと凝視したものであった。

一〇〇〇、彩雲二番機はパガンに先行すべく予定の分離行動に移り忽ち視界から消えた。

間もなく左前方断雲の下にマリアナ諸島最北端の火山島ウラカスが見えてきた。頂上から白い噴煙がゆるくたなびいている。

一〇四〇、アグリガン島の手前で零戦隊一番機大村中尉は三・四回バンク（翼を左右に交互に傾けること）するとみる間に、ゆるやかに左に翼を傾け降下姿勢に入り、列機十一機がそれに従う。いよいよ別離の時である。我等三人声もなく挙手の礼でこれを送る。みるみるうちに十二機の零戦は小さくなり、点となり、忽ちに視界から消えた。

ただ一機になった彩雲一番機は列島

線西方を高度を上げつつ南西に飛び、列島線から約一六〇km離れた地点から南下する。間もなく広瀬飛曹長から見張りを厳にするよう指示があり、高度五千米で酸素マスクを着用する。高度七千米付近で増槽を投下し更に上昇を続ける。テナン島西南西の地点まで南下した後、左に変針一気にテナン島に向う。零戦隊の攻撃開始予定時刻一三二〇にはテナン島南端上空一〇四五〇米の高度で偵察コースへ進入する。同時に機長南少尉は垂直写真撮影用の固定航空写真機K8型の自動撮影スイッチを入れた。周囲には雲一つない絶好の天候で、直下のテナン・サイパン両島共その全貌を我々に見せていた。テナン島を通過サイパン島上空へ侵入する。もうそろそろ零戦隊攻撃による黒煙が見えそうなものだが何の変化もない。今か今かと待つうちに

サイパン島北端を航過するも異常を認めない。計画ではそのまま帰途につき予定であったが、敵戦闘機邀撃の兆候が認められないので一八〇度旋回、一度はサイパンの北端から南へ向う。一四〇〇テナン島南端に達する間も依然としてサイパン島に変化がない。この二航過で18cm×24cmのフィルム一五枚全部を撮る。機長南少尉はこれ以上の偵察行動続行不能（燃料・酸素の



残量等から)と判断、残念乍ら戦果偵察を断念帰途についた。

思い出③

〔広瀬〕

サイパン上空に三〇分以上、敵機に対する心配もなく、高射砲の弾丸も届かない高度一万米以上で悠悠飛行したと云うことは、彩雲の性能を百%發揮したことになる。銃撃予定時刻を三十分以上待っても状況確認が出来なかったが、これ以上高々度飛行を続けることは、燃料・酸素・温度(零下三〇度)の関係上許されない。切角撮影したフィルムを硫黄島まで持ち帰るためには残念だが帰途につかざるを得なかった。

〔西村〕

写真撮影に入り、固定写真機を垂直に保持する私の手には、十数秒置きに作動するシャッターと、フィルム巻き上げの動きが感じられる。機はピタリと定針したまま飛ぶ。空気が稀薄なため、爆音も伝声管の声も聞えない。静寂そのものの一万米の高々度では、空中の一点に静止し、時の流れも停止しているような奇妙な錯覚が生じ、思わず胴体の下にあいている写真窓と固定写真機の僅かな隙間から直下の島を見る。ゆっくりと風景が後へ流れるのを

見て一安心。この頃には攝氏零下三〇度の機外の寒さは、夏の飛行服のままの我々の体を冷し、膝から股にかけてジーンとしびれさせ、指は凍えて思うように動かない。

高々度から眺めたサイパン島は、北西地域のサンゴ礁であろうか、黄緑の絵具をとかしたような色鮮やかな海面。濃緑の森林、茶色の大地で彩られたサイパン・テナンは、飛行場と俺体になんか点々と見える数百の飛行機等がなかったら、戦場を感じさせない風光明媚そのもので、数ヶ月前の死闘が信じられなかった。

サイパン・テナン上空の三〇分間は、零戦隊攻撃による黒煙を求めての焦立ちの裡に経ってしまったが、零戦隊は無線連絡をとらずに奇襲攻撃する打合せであったから致方なかったものの、上空を離脱する時は後髪を引かれるような気がしてならなかった。

帰路は敵戦闘機の攻撃圏を脱した後、「偵察終了我帰途につく」の打電をしてから、パガン島的情況を確認するため、一三二五、高度千米で島の上空を飛び、飛行場に不時着している零戦一機を認めた。

一五一七硫黄島第一飛行場に帰着、機長南少尉は直接寺岡長官に情況を報告この日の任務は終わった。

#### 4. その後の情況

このあと我々は彩雲二番機の帰還を飛行場で待ち続けたが、燃料切れの時刻を過ぎるも遂に帰らなかった。二番機はパガン島に暗号書を投下後、戦果偵察に向ったところ迄は確認されているが、無線連絡のないままその後の消息は全く不明である。

我々が硫黄島に帰着後知らされたことは、

① 硫黄島無線室が傍受していたマリアナの米軍放送は我々がテナン上空を離脱した時刻から暫くして、急に慌てた口調で「空襲・空襲、サイパン・テナンに飛来する飛行機は総てグアムに着陸せよ」と伝え、零戦隊がサイパンに接近した日本軍空母から発進したものと判断し、その空母に対する索敵機を出すようにとの命令も聞えたと云う。

② 列島線東方を超低空で南下中の零戦一機が、プロペラで波を叩き、プロペラの先端が変形、飛行困難となり攻撃を断念、パガンに不時着したとの連絡があった。(我々が帰途視認したのはこの機である。搭乗員は松下武男(甲飛11期)で潜水艦で救出されたが翌20年戦死。

搭乗員(氏名不詳)が被弾していた為、着陸時椰子林に突込み炎上戦死した。

翌日、航空参謀三沢少佐から「この攻撃隊は特攻隊と同じであるから、何とかして戦果を確認してやりたい」と言われ、29・30日と二回サイパンへ飛んだ。この二回の操縦員は風邪で飛行不能になった広瀬飛曹長に代って、三番機(二番機行方不明のため、二八日に増援機として木更津から飛来)の神崎十四春上飛曹(乙16期)であった。

しかし29日は島の上空に多量の雲があり、殆んど地上が見えず、30日はアナタハン島近くまで行ったが、エンジン不調の為引返し、遂に戦果確認を果すことが出来なかった。

27日のサイパン・テナン両島撮影フィルムは現象のため直ちに木更津に送られ、航空写真地図に作製・解読したところ、B-29二百数十機、P-51とP-61等約二百機、その他軍事施設は間もなく天覧の栄に浴したと聞くが、我々ペアも見せて貰い、偏流修正もほぼ正確でサイパン・テナンの全貌を余すところなく捉えてあったので安堵した。

本攻撃の戦果確認に意をつくした大本営海軍部は、後に東京空襲で撃墜し

③ B-29を攻撃した零戦一機中の一機だけがパガンに戻ってきたが、

たB 29搭乗員から「攻撃隊は極めて低空で来襲し、地上のB-29に対し、三度繰返し烈しい銃撃を行なった」との証言を得たという。実際の戦果は、戦後の米軍側資料によると、B-29四機を破壊、六機に大損害を与え、二二機に小損害という大きな戦果を挙げた。この為、第21爆撃団司令官ハンセル准将はアスリート飛行場のB-29をグアム島に移動分散する処置をとり、硫黄島攻撃の強化を計画した。

しかし、零戦隊一二機中一一機、彩雲隊二機中一機計一二機が未帰還になったことは、この種攻撃の続行を困難とし、以後零戦によるマリアナ攻撃は一度も実施されなかった。

附

機密 連合艦隊告示(布)第七五号

(昭和十九年十二月十日)

第一御楯特別攻撃隊

戦闘第三一七飛行隊附

- 海軍中尉 大村謙次
- 海軍飛行兵曹長 小野康徳
- 海軍上等飛行兵曹 北川磯高
- 海軍一等飛行兵曹 住田広行
- 同 右 東 進
- 同 右 加藤正人
- 海軍二等飛行兵曹 司城三成
- 海軍飛行兵長 新堀清次
- 同 右 上田祐次

同 右 高橋輝美  
同 右 明城 哲

昭和十九年十一月二十七日戦闘機を以て長駆「サイパン」島「アスリート」飛行場を急襲し、熾烈なる防禦砲火並に敵戦闘機の妨碍を意とせず、所在B-29に対し、挺身必殺の低空銃撃を数度に亘り反覆して大なる戦果を収めつつ壮烈なる戦死を遂ぐ、仍て茲に其の殊勲を認め全軍に布告す

〔文責西村〕



硫黄島に進出した第1御楯隊



作戦打合せ



三航艦寺岡長官に申告



硫黄島にある碑

知覧高女なでしこ会編

「知覧特攻基地」より(三)

この書物の「女子勤労隊員の記録」という章から既に二回に亘り転載したが、今回もその続きで、(三年生一五歳戦隊担当)鳥浜礼子の手記である。

私達が特攻兵舎を去る日が来た。西庄さんは私達を妹の様に可愛がって下され、私達も兄さんの様になって居た。

兵舎の人達から聞いたところでは西庄さんは出撃の時迄私達六名の事を話して居られたとの事である。

\*

皆さんさやうなら  
僅かな時間で急いで書きます。文も字も不器用でがまんをして読んで下さいね。

私達も何時迄も知覧に居たいんです  
が上からの命令で至し方ありません。  
私達の事は死んでも忘れないで居て  
ね。花の都の靖国神社に先に行って居  
ります。席も私達の横にちゃんとあい

て居りますよ。皆さん  
も死んだら靖国神社だ  
ね。いゝなあ。敵を徹  
底的に撃滅する迄は死  
んでも死ねないから  
ね。

皆さん達と此の知覧  
で愉快に過ごしたことは一生忘れませ  
ん。

吾が身はたとへ此の世を去らんとも  
乙女心で咲いてくれ  
知覧飛行場にたそがれせまる

パット翼ばたく我が愛機

可愛いあの子のマスコット

見れば忘れはせぬよ知覧の町  
まづい文ね。頭がいたくて文なんて  
つくれないよ。

愈々明日は出発です。お元気でね。  
皆さん達の御健康をお祈りします。

出撃の時は知覧の空を飛んで行きま  
すから送ってね。私達もいざと云ふ時  
には喜んで死んで行きます。ではさや  
うなら

くれぐれも御身大切に  
光男より

鳥浜さん  
松村さん  
帖佐さん  
寺師さん  
馬場さん

高城さん  
三宅さん  
田中さん

(注)稲田光男伍長Ⅱ飛行第一〇三戦  
隊、昭和二〇年五月一日出撃戦死、  
一八歳―知覧基地より都城基地へ移動  
するにあたって、女学生へ書き残した  
書状)

稲田さんへ

有難うございました。稲田さんが飛  
行機で都城へ行かれる時はよく見えて  
居りました。稲田さんの飛行機が見え  
なくなる迄私達は見送って居りました  
のよ。

光ちゃんや豊ちゃん達が都城へ行き  
なされると大変淋しくなります。でも上  
の命令で仕方はありません。

私達、一生の間みな様達の事は忘れ  
ません。又忘れる事は出来ません。  
都城へ行きなさっても御体を御大切  
に。お元気でね。

\*

鳥浜さん、寺師さん、帖佐さん、松  
村さん、馬場さん、高城さん、三宅さ  
ん、名前は忘れましたが皆さん本当に  
短い期間でございましたが、いろいろ  
と楽しく遊んで戴き真に有難う御座居  
ました。

楽しかった思い出は何日迄も自分の  
胸に収めて何時迄も何時迄も忘れませ

ん。

皆さんも自分達の事忘れないで下さ  
い。命令の前には何処迄も自分達は征  
きます。何もかも会ふは別れの始で此  
の世の運命で仕方ありません。縁が  
あったら、又何処かで会へる事と秘か  
に心に念じお別れします。

皆さんも近く何処かに動員で行かれ  
る事と思ひますが、何処に行かれまし  
ても身体には充分気を付けられて、何  
時迄も元気で楽しくお暮らし下さい。  
自分達も心から皆さんの御健康をお  
祈り致して居ります。

最後に特に思ひ出になる様に自分が  
今考へました歌を次ぎに書き残してお  
別れします。

1. 何処までも君がおくりしマスコ  
ット

愛機に乗せて吾は征くなり

2. 思出は吾は征くとも何日迄も

胸にきざみて忘る事なし

3. 身はたとへ知覧の空を離るとも

とどめおかし思出の花

皆さん、さようなら

(注)新田豊蔵伍長Ⅱ飛行第一〇三戦  
隊、昭和二〇年五月二五日出撃戦死、  
一八歳―知覧基地より都城基地へ移動  
するにあたって、当番の女学生に書き  
残した書状)

新田さんへ



有難うございました。きっと私達五名も約束通り靖国神社へ参ります。三月二十七日から四月十八日迄のたのしかった思ひ出は一生忘れられません。

私達は遠く動員に行っても、又、世界へ行っても忘れないでせう。

私達が真心こめて作ったマスコットは新田さんと一緒に行く所、何処迄も連れて行って下さい。豊ちゃん御体に気を付けられて都城へ行かれても便りを下さいね。又あふ日が何時か来るでせう。其の日をたのしみに。御元気でね。

光山文博少尉のこと

私達にとって一番忘れられない方があります。昭和十九年知覧教育隊出身で何時も外出の時は家にお遊びにいらっしやいました。

その光山さんが今度は特攻隊として知覧にいらっしやったときはびっくりいたしました。知覧基地最後の夜は、大声で歌をおうたひになりました。何時も歌等あまり口にされない光山さんが……

知覧を飛び立たれる時は、私達を愛機に乗せて行くと言はれ、姉の作ったマスコットを腰に下げて行かれました。

朝鮮の方でありました。光山さんの

出撃前の事が思ひ出されます。今ではマスコットも世界で……。

知覧麓の桜にもみぢ

幾代かはれど色香うせぬ  
清き流れと河鹿の声に

今日も平和だ日が暮れる

（注）特攻隊員につくった歌。慌ただしく出撃されたため、振武隊名、氏名不詳）

〈特攻隊〉

勝又少尉

知覧教育隊の特別見習士官二期生としてをられた。昨年、小学校の運動会

の時、見習士官の代表として走られた。体は小さかったけれど、棒たほしの時も一番に走ってゐた。出発の前日「勝又勝雄が行くんだから、必ず戦いは勝つ」といって出撃された。母に

「そんなに戦の事を心配したら、おばさんの頭の毛はとれますよ」といはれた。出撃五月四日午前六時

光山少尉

知覧教育隊の時、学生としてゐられた。勝又さん達より前の見習士官一期生。お生れは朝鮮の人、アリランの歌を最後までうたってをられた。出撃の時、姉の作ったマスコットを胸にさげられて行かれた。お見送りに行っ

た。出撃五月十一日午前八時

中原少尉

隊長さん。家でよく遊んでいらっしやった。筒井さんに似ていらっしやった。下平さん達と一緒に攻撃へ行かれたけれど、飛行機がわるい為かへっていらした。其の次、雨の降る日

行かれた。宮川さん達と一緒に行かれたけれど、宮川さん達は帰って来る。出撃五月二十五日

横山少尉

中原隊長さんと友達。一度出撃されたけど大雨の為引返す。出撃五月二十八日

市川少尉

横山さん達と一緒に出撃。「ストウ少尉」と一しよに。出撃五月二十五日

下平軍曹

昨年、窓原さん達と一しよに知覧へいらっしやった。毎日、家にいらっしやる。「陸軍空の特攻隊」の歌を友、田中さんと二人で一日中、うたっていた。出撃五月十一日

田中伍長

下平さんと一しよに出撃。お別れの時、見送りに行った。隊長さん達より一足先に行かれた。知覧へ昨年、下平さん達といらっしやった方。出撃五月十一日

市川伍長

島さん達と一しよだったけれど、飛行機が悪いため引返し、一人ながい間何時もたのしく遊んで下さった。別れの夜、自動車の上から最後の言葉は「とうとう礼ちゃんの踊りは見られなかつたね」と云はれてお別れした。出撃五月二十八日

益子伍長

出撃五月二十五日

浅見伍長

よく二階で「チクオンキ」をかける。ネコをこはがり、逃げるのを、おっかける。ネコといっただけでも、こはがる人だった。出撃五月二十八日

長吉軍曹

知覧教育隊の時、生徒としていらっしやった十一期少年飛行兵。三角兵舎に奉仕に行った時は、森スミ子さん達の班。福岡に飛行機を取りに行かれた時も手紙頂く。出撃

河井伍長

二〇歳。思ひ出は「おやちと坊や」。河井さんには皆が、ぼうやぼうやとよんでゐた。おやちと坊やは年と同じ二〇歳である。けれど坊やは可愛、顔していらした。おやちと坊やは何時も二人、離れない。二人は家のなれに寝ころんでゐた。何時だつて。

河井ぼうやは、今頃沖繩の海でさびしいことだせう。おやちは飛行機が悪い

ことだせう。おやちは飛行機が悪い

ため、坊やの所へはまだ行けない。何時もいつも、おやぢは坊やの所へ、行きたい行きたいと云つてゐる。坊やとも、幾日間と云ふ日を楽しくあそんだ。時には、おやぢと坊やは口争いもした。思ひ出のおやぢとぼうや。出撃六月八日

#### 宮川軍曹

二十一歳。血染めの鉢巻きを差上げる。出撃前夜は空襲警報があり、防空ごうに二、三回はいった。六人位。ゆるいのみねしてこはかった。形見に万年筆をもらふ。出撃は大雨の日だった。出撃六月六日

#### 滝本伍長

二十歳。北山ノブちゃんによく似ていらっしやる。姉と同じ年、形見に航空時計をもらふ。

#### 河崎伍長

第一次総攻撃の時から知覧にいらっしやる。宮川さん、滝本さんと仲のよい人。奉仕では前田さん達の班。

#### 松本軍曹

真太治さんは、中島さんと仲の良かったので、中島さんは、手が痛いのに一しょに行きたいと云つて一しょに行かれた。何時も家から出ない人。出撃六月三日

#### 中島軍曹

母が子供の様に可愛がつてゐた。中島さんは昨年輸送の為、一度知覧にいらっしやった。若いのに口ヒゲをはやして、片手を傷つけていた。白いホータイが目にかぶ。出発の折は、まだ手はホータイのまゝだった。出撃六月三日

#### 伊藤軍曹

出撃の前の日迄家でよくあそんだ。手紙をよく書く人だった。何時も筆を、はなさなかつた。毎晩、毎晩おそくまで、毛筆で御両親や友達に書いていらっしやった。最後の夜、「明日の夜中の二時、白いマフラをかけて、入口から手紙を書く準備をしてはいつて来るから、その時はおそれよくあそんでね」と云はれ攻撃に行かれた。出撃六月三日

#### 河野少尉

熊本の方。最後の夜、尺八で二十曲ぐらゐの特攻隊歌を。夜空をみながら。おとなしい方だった。尺八を愛機に乗せて突入するのだ。といつていらした。出撃五月四日

#### 隊

#### 〇二中隊

#### 池田曹長

田中米ちゃんに似た人。無口な人。

#### 村上曹長

別れの時、しつかり頑張ってくれと云はれた人。よきお兄様。中曹長

色の黒い人であまり口をきかない人。小さい方であった。

#### 市原曹長

面白い人。ナツミカンのあだ名。よく戦争の御話をして下さる。

#### 夏目軍曹

何時も黄色いマフラをしていらっしやる。寺師さんのお兄様に似ていらっしやる。こっけいな人で、一番話をして下さる。ホワイトチューチュー(しらみ)が居て洗濯にこまる。

#### 齋藤軍曹

無口な方で、徳之島で海におちる。行かれる前の夕方は、私達のそばを離れない。知覧教育隊出身、太刀洗十一期生。

#### 今村軍曹

齋藤さんと一しょに。

#### 小林伍長

ぼっちゃんのあだ名。見ただけでは、ぼっちゃんみたい。だけど話をするとお兄さんみたい。

#### 権藤伍長

背の高い人。面白い人。ヤキウの真似をする。あだ名文ちゃん。福岡出身。

#### 三浦伍長

あだ名チビちゃん。小さい人。ちょこちょこしてゐる。小さいのに、何をすることも大きな人達の上手に行く。

#### 〇三中隊

#### 渡辺曹長

無口な方。佐々木曹長

#### 何時もひび……と笑つていらつ

云つた、「三浦さんはおそろしい」

#### 渡辺軍曹

あだ名、マンザイのおとっちゃん。一番思ひ出深い。年を取りおちついた方であった。自分から「おとっちゃんがおとっちゃん」といつてをられた。通信を書いて教へてくれた。最後の言葉に「ハブラシ工場」。私達がハブラシ工場を教へてといふと、西庄にきけといつていらした。写真を一枚おいて出発。桜花と共にあの見送った日が最後だった。

#### 黒田軍曹

アコデオ。徳之島に一ヶ月間不時着。

#### 阪場軍曹

色が黒く、鼻の方。知子ちゃんのマスケットを持って行く。

#### 坂口伍長

ぼっちゃん。飛行機の絵をよく書いて下さった。上手だった。おとなしい

#### 三浦伍長

方で、女学生はお兄様と呼んでゐた。渡辺さんと共に行き帰って来なかった。桜花を手に持って行った。

松本伍長

とてもとてもこっけい千万。「さうですか」「さうですとばい」「なんですか」の言葉が多く、一人違った調子。

西庄伍長

川辺の大坪よしかさんに似て居りました。それで「よっちゃん」とよんでゐた。何時も「俺は行ったら帰って来ない」というのが口ぐせだった。思ひ出に金のマスコットをあげた。これと共に体当りだ。「やはり一人では淋しいからな」と云はれた。

松原伍長

あだ名はマツカサ。頭が大きく、ぼうしはちよこんと頭にのってゐる。

持伍長

無口でもほん生。空襲の時は手をつないで松林に逃げる。

へ一〇三戦隊

将校室 東条少佐 清見大尉 片山中尉

出口少尉

兵舎に行かなくなる三日前、不時着して帰って来る。

古橋少尉

子供好きな方。帰る時は何時もトラック迄見送りに来て下さる。

大道少尉  
おしゃれさん、青いマフラーがよく似あふ方。

田辺少尉

妹のやうに可愛がって下さった方。笑ふ時は目をほそくして、女のせない戦闘機の歌が大好き。

中村少尉

トランプをしてよく遊ぶ。洗濯が多い方。

山崎少尉

子供好き。面白い言葉、ガンスイ、グラマン、ドーモス、マイドノコ、ケスリバチ。

西山曹長

前は金歯。やさしい方。何んでも知らない事をくはしく教へて下さった。

深田曹長

何時もお酒をのんだ様な赤ら顔。「とりはまさん」と大声で叫ぶので耳が痛くなった。背中のまがった小さい人。

大志真曹長

尺八上手。出発の時は、何時も最後の一曲といつて松林で一曲。

森本曹長

酒をのんだ様な人。知覧の町へ行くと言つて一しよに自動車に乗つて。いっばいだったので「先生は乗らないで歩いて来い」と云つてはづかしかった。

た。沖縄方面に行つて帰って来ない。その日だけ見送りをしなかった。帰つて来たらナゾの話を聞かせると出撃。

古橋軍曹

顔の小さい人。家にも二回いらつしゃつた。新田さんと親友。たつえさんの日の丸の旗を背中につけて行った。徳之島へ行く。途中グラマンと空中戦。死なれたか生きていらつしゃるか今日迄わからない。

新田伍長

小さく可愛い、といったほうが似合ふ。顔の横にきずがある。最後の十八日は、セントウシキ所へ行つていらして、お別れのあいさつも出来なかった。親友、稲田さん。みっちゃんと、とよちゃんによぶ。

渡辺伍長

小さい小さい人。二回も不時着、無事帰つて来られた。思ひ出す最後の一曲「別れ出船」、ハーモニカでとつても上手。女学生に「別れがづらいね」と、あふたびに声をかけてをられた。

稲田伍長

徳之島へ行かれて帰つて来られぬ。十八日迄は、出発の時クリームをつけて行かれた。女学生にプリンにはひがすると笑はれる。別れの写真を下さる。

続

### 高野山における 空挺墓前祭

毎年9月に行つてゐるこの祭典については、既に二回ばかり紙面をお借りしてゐるので、今回はその付帯行事である市街行進について紹介する。これも毎年行つてゐることだが、菩提寺の不動院から霊域の入口まで約五〇〇米を、応援の自衛隊音楽隊を先頭に新合祀の遺族、全国から参加した会員の順に行進し、高野山の名物になつてゐる。新合祀とは最近逝去した会員は希望により分骨を墓に収めることができ、毎年十柱内外がある。空挺同志会の会員は旧軍生残りとして自衛隊空挺関係者で、老兵は逐年減少してゆく。田中賢一記





# 本土上空の特攻

## B-29に対する体当り ①

(成都発進のもの)

通りであった。

B 29の使用方面については、昭和18年春頃までは欧州戦場を予定していたが、

ドイツは19年末頃までには壊滅するであろうと考え、戦に疲

れて重慶政権を支援する為にも日本に対し使用することになった。

## B-29の成都進出の経緯とその第一回九州爆撃

(戦史叢書抜粋)

マッターホーン計画の策定

B-29をもってする日本本土爆撃計画が具体化されたのは、昭和18年(一九四三年)夏ごろのようであり、当時B-29部隊については、昭和19年(一九四四年)10月までに二〇個グループ(四〇個各グループ二八機)翌20年5月までに更に一〇個グループが作戦に使用可能と予想されていた。

また、その使用基地としては太平洋、中国両方面が考えられたが、当時、太平洋方面においては昭和19年(一九四四年)中に、日本本土爆撃が可能な島嶼を占領し得ると思われなかつたので、中国基地を利用することにした。この目的のため中国基地を使用することは、中国人の士気を鼓舞し、政治上からも有益と考えられた。

そこで、印度に対する戦略物資の輸送集積、同地から成都に対する戦略物資の空輸、成都におけるB-29用飛行場の設定などに関する細部計画に検討が加えられ、カルカッタを根拠基地、成都を前進基地として対日爆撃を行なう計画が、昭和18年(一九四三年)11月策定され、作戦開始を翌19年5月初

頭と予定した。なお、同計画は「マッターホーン」計画という秘匿名称で呼ぶことが決められた。

マッターホーン計画の大綱は、昭和18年12月カイロ会談において説明され、ルーズベルト米大統領からチャーチル英首相及び蒋介石中国総統に対し、それぞれ印度及び中国におけるB-29基地の獲得、設定の協力を求め、確約を得た。

インドの根拠基地は、カルカッタ西方約七〇マイルのミドナポール地区に多数設定中の航空基地を拡張し、B-29に使用可能にした。クアラグプール、カライクンダ、チャクリア、ドドクンディなどであった。

中国のB-29用基地としては、昆明付近に輸送基地が設けられ、作戦基地としては初め桂林、柳州地区が考えられたが、同地区は日本軍に対し多数の空地防衛用兵力が必要であったため、成都地区に変更された。

成都地区には、B-29用飛行場が五個設定されることになった。シンチン、キユングライ、クワンハイ、ペンシャン及びチュン・チン・チョーであった。

これらの飛行場設定のため二〇万余のぼる現地労働者が徴備され、1月下旬同作業が開始された。完成予定は

本件については第22号(7年2月)で飛行第4戦隊の小月会及び第25号(7年11月)で飛行第47戦隊の増会の協力を得て、それぞれの特集記事を掲載したが、今回はこの戦法を採用するに至った経緯等を一般的に観察すると共に、既述の二個戦隊以外の体当り撃墜の記録について触れてみたいと思う。なお全般経過を辿る為に前回述べた戦例を重複記述することもあると思う。

## B-29の開発・生産・使用

米陸軍省が陸軍航空の要請にもとづき、一〇〇〇マイルの行動半径をもち、性能その他すべての点でB17やB24に勝る四発大型爆撃機の実験的開発を認可したのは、昭和14年12月だった。その後紆余曲折を経て昭和17年9月には、ボーイング社に量産の発注がなされた。初めの性能については次の

B-29性能の概要

発動機	R-3359-13	最大出力2,140HP×4
乗員	10名	
自重	32,400斤	
総重量	62,900~64,000斤	
最大速度	576浬/時	
巡航速度	370浬/時	
実用上昇限度	9,725米	11,400米の資料もある
航続距離	6,600浬(爆弾7,200斤)	最大9,650浬
武装	12.7耗×12	20耗×1
爆弾	9,000屯	

二個の飛行場は3月末までで、ほかの二個は4月末までであった(残りの一個の完成予定期日は不明)。また、これら飛行場付近及びその外周には、防空戦闘機用飛行場が設定された。

B-29用飛行場の滑走路は長さ約八、五〇〇フィート、厚さ約一九インチで、戦闘機用のものは、長さ約四、〇〇〇フィート、厚さ八〜一二インチとされた。

一方、B-29装備の部隊としては、それより先昭和17年(一九四二年)6月第五十八爆撃ウイング(Wing)が編成され、9月からカンサス州サリナ地区で訓練を開始した。次いで11月、第七十三爆撃ウイングが編成され、同月これら両ウイングをもって第二十爆撃コマンド(Command)司令官ウォルフフェ准将)が創設された。同コマンドには爆撃ウイングが更に配属される予定であった。

第五十八爆撃ウイングは四個グループ、各グループは四個スコードロンからなり、スコードロン七機、グループ二八機、ウイング一〜二機であった。なお、第二十爆撃コマンドは、昭和20年(一九四五年)4月創設された第二十航空軍(20th Air Force 司令官アーノルド大将、司令部ワシントン)に編入された。

ウォルフフェ准将は、19年1月、第二十爆撃コマンド司令部の先遣隊を率いてニューデリーに到着し、印度及び中国におけるB-29用飛行場設定を開始するなど、マッターホーン作戦準備を推進した。

成都における航空作戦準備

同年4月初頭、B-29が初めてミッドナポール地区のチャクリア基地に着陸した。その後、B-29は逐次同地区に到着し、5月上旬ごろまでに、米本国を出発したB-29一五〇機のうち、重大な事故を生じた九機を除く大部分がカルカッタ地区に到着した。第二十爆撃コマンド司令部及び第五十八爆撃ウイングも同地区に展開した。

マッターホーン作戦のための軍需物資の成都基地輸送は、すべて空輸によらなければならなかった。

この空輸に任ずる輸送機部隊(C-47その他)は、4月中旬カルカッタ地区に到着し、ヒマラヤ山脈を越えて成都への空輸を開始した。成都への空輸は、B-29自隊をもっても行なわれた。

ウォルフフェ准将は、B-29が成都から対日爆撃を実施するために必要な軍需品を一機当たり二三屯と考え、5月1日までにB-29一〇〇機二出動分と、成都における防空に任ずる第十四

航空軍(14th Air Force 司令官シェンノート少将)の所要軍需品を合わせ、六、〇〇〇屯の軍需物資を集積しようとした。

しかし、輸送機の数が少なく、またB-29により輸送量が予想ほどでなかったため、空輸は予定どおり進捗せず、更に5月下旬日本軍が洛陽を陥れ引き続き長沙方面に進出し、この方面の作戦が重大化したため、マッターホーン作戦用の集積軍需品を長沙方面の航空作戦に任ずる第十四航空軍に振り向けなければならなくなった。このため、マッターホーン計画において

は、対日爆撃開始を昭和19年5月1日と予定していたが、それを延期しなければならなくなった。

6月8日統合参謀本部(JCS)は、少なくともB-29七〇機をもって6月15日対日爆撃を決行し、長沙方面の作戦及び新たに企図する重要な作戦(サイパン上陸作戦を指す)に協力すべき命令を發した。

成都地区の飛行場設定は予定より遅れたが、4月24日クワンハイ基地に初めてB-29が着陸した。他の四個の飛行場は5月10日までに滑走路が完成し、一部は作戦に使用可能となっていた。しかし、これら前進基地においては、前述の事情により、軍需物資の極

度の節約が必要であった。

第二十爆撃コマンドの九州第一回爆撃

これより先昭和19年3月12日、統合参謀本部は太平洋方面の作戦を決定し、トラックに上陸することなくマリアナを攻略することとし、サイパン上陸を6月15日と決めた。

この決定に伴い、4月10日統合参謀本部は、サイパン飛行場の使用開始を同年初秋ごろと考え、マッターホーン作戦使用予定兵力を第五十八爆撃ウイングの四個グループのみにとどめ、他のウイングはマリアナに前進させることに決定し、同基地の増加に伴って派遣兵力を更に強化し、全部で一〇〜二個グループにすることにした。

第二十爆撃コマンドは6月5日、バシコクに対し訓練の目的を兼ねた出動を行なったのち、対日爆撃を開始した。

対日爆撃のための爆撃目標について、マッターホーン計画では次の目標体系が重視されていた。

飛行機工業

製鉄工業

港内船舶

市街地

なお、右にパレンパンの精油所が加えられていた。

同計画において、これら目標体系の

優先順位は決定されていなかったが、第二十航空軍は製鉄工業を最も有利な目標体系と考察した。

ワシントンからの命令に基づき、第五十八爆撃ウイングのB-29は、6月13日成都への移動を開始した。カルカタ地区出発に当たり、各機は戦闘装備をし五〇〇ポンド爆弾を二屯積載し、成都では給油だけを実施するようになった。

なお、B-29搭乗員の基準は次のようであった。

- 機長 操縦者 将校一名
- 副操縦者 " 一名
- 航法―爆撃者 " 二名
- 機上機関係将校 " 一名
- 発動機工手 一名
- 原動装置係 一名
- 電子係 一名
- 無線係 一名
- リーダー係 一名
- 集中射撃管制係 一名

計 一一名  
第五十八爆撃ウイングは6月15日一五一六、成都基地離陸を開始し、七五機が出発したが、所命目標の八幡製鉄所付近上空に達したのは四七機であった。

B-29が最初に目標に侵入したのは、16日〇〇三八であった。八幡は完

全に灯火管制されており、そのうえ煙霧が市街地をほとんど覆っていたため、目視爆撃ができたのは一五機で、残りの三二機はリーダー爆撃を行なった。

空中で日本軍の戦闘機一六機を数えた。高射砲は猛烈に射撃したが不正確で、B-29六機に軽微な損害を与えたに過ぎなかった。照空灯はめざましく、またうるさかったが、高射砲の射撃にはあまり効果がなかった。

この攻撃で、第五十八爆撃ウイングは日本軍の攻撃をあまり受けなかったが、攻撃途中の不時着を合わせ七機と五五名の人員を失った。

成都に着陸したB-29は、同地集積燃料の関係から、直ちにインドに帰還することができず、数日間成都基地にあり、日本軍に対し格好な爆撃目標を提供していたが、日本軍の攻撃はなかった。

6月18日行なった写真偵察の結果によれば、八幡製鉄株式会社には、コークス炉から三、七〇〇フィート離れた発電所に若干の命中弾が認められただけで、製鉄能力に異常のないことが判明した。

しかし、サイパン上陸と同じくして行なった本戦略爆撃が、日本国民に与えた精神的影響は甚大であった。

成都における飛行場建設



成都に進出したB-29





# 北九州における防空戦闘

成都を発進したB-29の北九州爆撃は次の通り行われた(米軍資料)

年月日	標目	出撃機数	爆撃機数	損失機数
19・6・19	八幡	68	47	7
19・8・7	佐世保その他	18	12	0
19・8・10	長崎	29	24	1
19・8・20	八幡	88	71	14
19・10・25	大村	78	59	2
19・11・11	大村	96	29	5
19・12・19	大村	36	17	2
20・1・6	大村	49	28	1

夜間爆の場合(台曆日では翌日に及んでいる。

これに対し我が方の資料をとりまとめたものは次の通りである(「借行」連載の本土防空作戦、63年8月号)両者に若干日付の違があるが、正子前後の戦闘をどちらの日付に記録するかによるものと思う

これらの表でみると敵機数の最も多いのは19年8月20日であり、B-29の損失も一番多く、その中には特攻隊当りによるものが含まれている。

西日本の防空を担当していたのは第12飛行師団であり、隷下の飛行部隊及びその日の出動可能機数は次の通り

自昭和19年6月15日  
至昭和20年1月6日

## 中国基地B-29の本土爆撃概況表

備考	月日	時刻	来襲機数	主要爆撃地区	地上損害	戦果		わが飛行部隊の損害	摘要
						撃墜	損害を与えたもの		
一 本表は主として「大本営発表」に基づき筆者(戦史部担当者)が整理したものである。 二 但し、地上損害は「日本製鉄(株)社史」及び「長崎造船所百年の歩み」による。	昭和19年6月16日	〇一三〇〇 〇三三〇	二〇数機	倉幡地区	八幡製鉄所 損害軽微	七 确实四 不确实三	四		
	7月8日	〇〇〇〇〇	約一三	九州北部 九州西部		なし			雲上から盲爆
	8月11日	〇一〇〇〇 約一時間	二〇内外	九州西部 九州北部	長崎造船所 船具工場などに被爆	なし			九州西部以外は盲爆
	8月20日	一七〇〇〇 約一時間	約八〇	倉幡地区	八幡製鉄所 相当な被害	二三 (内二体当たり)		三	
	8月21日	〇〇〇〇〇 約一時間	二〇内外	倉幡地区		なし		二	雲上から盲爆
	10月25日	一〇〇〇〇 一一三〇	一〇〇内外	大村	海軍第二十 一航空廠に 相当な被害	五	一九		
	11月11日	一〇〇〇〇	八〇内外	同		なし			雲上から盲爆
	11月21日	一〇〇〇〇	七〇〇八〇	同	同右	確認一四 (内一体当たり) 不确实一一			雲上から盲爆
	12月19日	午前	三〇〇四〇	同	同		六		自爆 未帰還 四
	昭和20年1月6日	一〇〇〇〇	七〇〇八〇	同	同		三	十数機	九州地区密雲 雲上から盲爆

だった。

独飛19中隊	百式司偵5機(3)
飛行4中隊	二式複戦28機(12)
飛行59中隊	三式戦 21機(5)
16飛行団司令部	四式戦 1機
飛行51中隊	四式戦 18機(11)
飛行52中隊	四式戦 14機(8)
計	87機(49)

( )内は夜間出動可能  
この頃はB-29の高度が五、〇〇〇米内外のものが多かったため、体当たり戦法を正式に採用するには至らなかったが、8月20日の戦闘で体当たりが実現した。

野辺重夫軍曹 (少飛6期)

高木伝蔵兵長 (少飛13期) 同乗の体当たり二機撃墜 (戦史叢書抜粋)

この戦闘において、飛行第四中隊は最も大きな戦果をあげた。なかでも、野辺重夫軍曹機 (高木傳蔵兵長同乗) はB-29の梯団長機に果敢な体当たりを行ない、同機だけでなく、その誘爆により同編隊の二番機も墜落させ、一挙にB-29二機を撃墜した。

当時、空中にあって野邊機の体当たりを目撃した小林公二大尉及び樫出勇中尉は、その時の状況を次のように回想している。

当時、小林機は高度七、五〇〇米で戦隊の指揮をとっていた。敵機を発見するや、最前方の佐々編隊 (長佐々利夫大尉) が敵の第二梯団に突進し、西尾、木村両編隊がこれに続いた。

佐々編隊が突進を開始した時、それから幾らか遅れ、折尾上空にいた野邊機の行動がよく観察された。

間もなく、野邊機は第一弾を放ったがやや遠かったためか成功せず、敵機は回避運動を行なった。そのまま続いて第二弾をかけるには位置が悪く、要地はすぐそこにあり、反転し再攻撃をかける余裕がない状況であった。

そのとき「野邊、体当たり敢行」の無線があった。野邊機は一直線に突進し敵梯団長機に激突した。大きな火の渦が生じ、両機はバラバラになって墜落した。そのとき飛び散った黒塊 (発動機らしい) が敵の二番機にぶつかり、同機は左翼を失い大きな錐揉みを描いて落ちて行った。

野邊機の壮烈無比の体当たりを刺戟されて、飛行第四中隊は特に目覚ましく活躍した。その状況は、当時戦隊の情報主任をしていた樫出勇中尉の回想によれば次のとおりである。

私は、野邊機が攻撃した敵編隊の隣りの編隊長機に機首を向け、五〇〇米に迫って引鉄を引いた瞬間、敵機左翼の付け根に炸裂するのが見えた。敵機は立ち上がるような形でありと浮き上がったかと思うと、たちまち片翼を失い、奇妙な錐揉みになって落ちて行った。

この日岩井伍長及び第一中隊長の小林大尉も射撃によりB-29を撃墜している。

野辺重夫君 陸軍軍曹 高木傳蔵君

昭和19年8月20日、一片の雲もない碧空を茜色に染め始めた5時半頃の事である。北九州地方の空襲に向かう空の要塞、B-29に壮烈な体当たり攻撃を敢行した二人の慰霊碑がある。

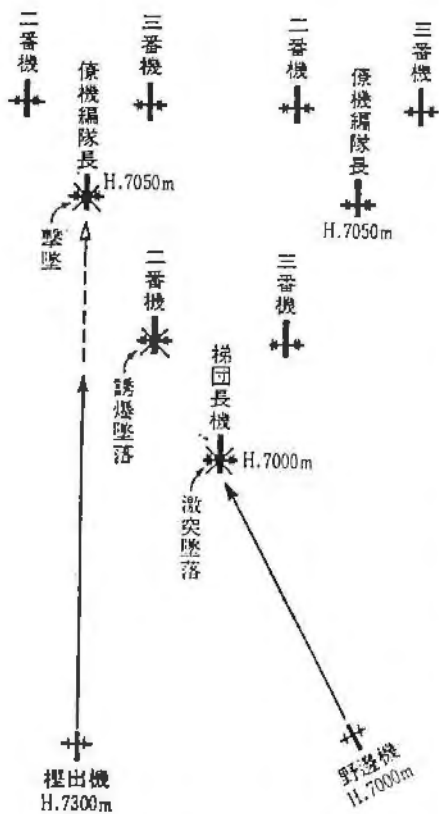
中国四川省成都発進のB-2980機が、対馬海上より高度7千メートルを以て北九州の軍需工業を攻撃目標として侵入しようとした。

一方敵機迫るの情報を接受するや、わが下関小月航空基地の全隊員は命令一下真夏の空に銀翼を輝かせながら、米機一機たりとも北九州には侵入させないぞと急上昇して行った。

敵編隊の一部はすでに八幡に爆弾の雨を降らせていた。その内の4機編隊が折尾上空に差し掛った時の事である。

この奥の丘の上の中空に突刺す恰好の一基の碑がある。やや斜めの碑面には「嗚呼忠烈 体當勇士 陸軍准尉

野邊機体当たり平面図



注 本図は「樫出勇回想」による。

る。外側の1機めがけて矢のように突っ込んでいった迎撃機があった。それは空中でのほんの一瞬の出来事。

体当たりを受けたB 29は真っ赤な火を噴いた。その瞬間隣りにいた、機の翼にその火達磨が触れた。火を噴いた体当たり機は紅運の焰を空高く吐きながら、錐揉状態になって落下、もう一機は断末魔の悲鳴にも似た爆音を残しつつ現在永大丸小学校運動場あたりの谷間に激突、爆発炎上した。

野辺准尉・高木軍曹の写真は23号に、北九州市八幡区にある碑の写真は20号に掲載してある。

### 大村地区海軍航空の要撃戦闘

#### 坂本機の体当たり

本土防空の全般は陸軍が担当していたが、軍港等海軍の施設は海軍の責任だった。前掲の表でみる通り佐世保を含む大村地区は屢々攻撃を受けた。

10月25日、11月11日のことは省略し、体当りの行われた11月21日のことを述べる。

11月19日及び20日には、B-29が印度方面から中国に、それぞれ96機及び20機計116機前進したとの情報があった。

これらにより西部軍は、近く来襲があることを予期し、警戒を厳にしていた。

たところ、21日支那派遣軍から逐次、次の情報が入った。

○五〇〇成都地区通信感度調整を実施す  
(○五四五受信)

○六三五―〇六四七の間 武昌北方

200軒東進目標六  
(○七三〇受信)

次いで〇八四一、濟州島の警戒機が目標捕捉を報じた。

西部軍は〇八四九警戒警報を、〇九一九空襲警報を発令した。

同日、九州北西部は一带は本曇りで、ところどころ微雨、雲は七百〜千米と四〜五千米に二層あった。

第352航空隊と大村海軍航空隊は〇八二〇月光を発進させ、所定哨区である大村西方180軒付近の哨戒を命じ、次で

〇九〇五零戦43機、雷電16機をもって大村付近上空を哨戒させた。

敵機は〇九四五〜一〇三〇頃の間、7〜12機の編隊を組み、高度七千米で大村地区に侵入してきた。海軍機はこれを攻撃して、その行動を攪乱させた。特に三五二空の坂本幹彦海軍中尉

は(海兵71期)、B-29に相当な損害を与えた後、壮烈な体当りを敢行し、一機を撃墜して戦死した。

第12飛行師団は、敵機の退去に乗じて攻撃し、相当な戦果を報じたが、西

部高射砲集団は、天候に災いされ戦闘するに至らなかった。

大村地区の来襲機数は約100機と判断され、雲上から投弾して退去した。なお佐賀、大牟田、熊本にも投弾があった。

同日の戦果は撃墜5機、撃破19機と発表されたが、海軍航空隊は雲上から爆撃をうけ、相当な被害を生じた。

これに対し米軍の記録は次の通りである。

#### (11月21日大村第三次攻撃)

11月21日は好天が予想されたので、第20爆撃コマンドは、同日の出勤を決定した。これはマリアナ基地の第21爆撃コマンドが、初めて東京を空襲する3日前である。

11月21日早晩、B-29は109機が離陸したが、またも悪天候の為、13機は上海に、10機は臨機の目標に各個に投弾し、また5機は大牟田を大村と間違えて爆撃した。

大村に到達したのは61機であり、レーダー爆撃を実施したが、工場地帯に損害を与え得なかった。

日本軍機の抵抗は相当に盛んで、B-29一機が撃墜され、四機未帰還となった。

成都離陸時に生じた墜落一機を合わせると、同日の損害は未帰還6機、搭

乗員51名が戦死または行方不明となった。

なお、日本軍機に与えた損害は27機撃墜、19機撃墜確実、24機撃破と報告された。





### 付南満州における防空戦闘

南満州の要地奉天鞍山地区の防空を担当していたのは独立第15飛行団である。それまでこの飛行団の主力であった第70戦隊は、11月5日内地に転用され、鞍山を発つて柏に向つた。その後を埋める為新編の104戦隊（戦隊長滝山和少佐）が11月末内地から到着したが、飛行機、人員とも寄せ集めで、戦力は十分でなかった。

この頃における独立第15飛行団の兵力、配置は次の通りである。

独立第15飛行団司令部	鞍山
第104戦隊	四式戦 約12機 鞍山
	二式戦 約30機 鞍山
	一式戦 約10機 湯岡子
独立飛行第25中隊	約30機 遼陽
	二式複戦主力 約10機 鞍山
独立飛行第81中隊	百偵 約10機 鞍山
満軍戦闘隊	九七戦、一式戦 約10機 奉天
計	約100機

### (12月7日の防空戦闘)

#### 防空飛行隊の出動

12月6日夕独立第15飛行団は、B-29襲動に関する情報をうけ、警戒戦備をとった。

7日朝、成都方面在支空軍出撃の情報に続き、B-29済南西方通過東北進中、の情況が判明した。

そこで〇八三〇、土生飛行団長は各部隊に対し、出動を下命した。間もなく、第104戦隊長及び独立飛行第81中隊長から、一部をもって特攻攻撃する、との報告があつた。同飛行団長は、一コ小隊程度ならば、とこれを承認した。

滝山第104戦隊長は、特攻志願者のうちから次の四名に特攻を命じた。

遠宮中尉、森中尉、永田曹長、以上二式戦

尾崎少尉 一式戦

敵機は山海関から盤山上空を通過、東北進した。八機の密集編隊が10個発見された。

土生飛行団長は、B-29は奉天に向うものと判断し、同地区の防空を命じた。

滝山戦隊長は、この敵機に対し、奉天南西30〜50軒の上空において攻撃を下令し、戦隊本部編隊は敵最先頭編隊を攻撃し、その一機を撃墜した。奉天上空では、同戦隊の二式戦や独立飛行第25中隊の二式複戦が、それぞれ果敢な攻撃を反復実施した。

#### 特別攻撃機の戦闘

特攻に指名されていた永田曹長は、

敵機を反復攻撃し、相当な打撃を与えたが、残念にも撃墜された。空中でこれを目撃した曾根曹長機は、この敵機を宮口湾上空まで追撃、40耗砲で撃墜し、その功を永田曹長に譲った。

この日の戦闘において、独立第15飛行団はB-29撃墜14機、撃破一機の戦果を報じた。撃墜のうち5機は特攻攻撃による戦果であつた。また撃破した一機は、その後渤海湾に墜落したことが確認された。

### (12月21日の防空戦闘)

#### 独立第15飛行団の邀撃

12月21日早朝、突如独立第15飛行団司令部にB-29来襲の情報が入つた。この日南満一帯は快晴であつた。

土生飛行団長の命令により、各部隊は逐次離陸した。滝山第104戦隊長は、一部（二式戦）に待機を命じ、主力を

満軍飛行隊で編成された蘭花特攻隊においては、軍官学校第一期生の春日園生中尉がB-29に前方から接敵し、体当りした。

もつて出動し、戦隊長編隊群が盤山付近で敵を捕捉するや、敵最先頭梯団に集中攻撃を加え、先頭機を撃墜した。約10名が落下傘降下するのが見えた。

このときの状況を目撃していた、満州国軍航空学校教官、野上完一中校は、次のように語つた。

同戦隊の一部（二式戦）は、主力と時間間隔をおいて出動したが、会敵で

「春日園生中尉が体当りを敢行したとみるや、同機は木葉微塵に砕けて、飛び散つた。相手の敵機はやがて、徐々に頭を下げて隊列を離れ始め、落下傘により脱出するのが二つ三つと見る間に、機体は急角度に頭を下げ、錐揉み状になって、沙河の河原に激突し、爆発して大きな火柱となつた。」

独立飛行第25中隊は、二式複戦約15機をもつて出動し、奉天西方上空で敵を捕捉し、B-29一機撃墜を報じた。満軍西原成雄少尉機は、西原成雄少尉がB-29に体当りし、一機を撃墜した。なお、松本太平洋少校は特攻攻撃を加えようと、敵至近距離に接近した

#### 防空飛行隊の戦果

が、集中砲火を浴びて撃墜された。

これら満軍特攻機の操縦者は、いずれも日本人であり、満州国防衛の為、回国軍人としての本分を全うしたのである。

この日の戦闘において、独立第15飛行団は、B-29四機撃墜の戦果を報じた。敵編隊は先頭機を失った為か、過早に投降して退散し、地上の損害は殆どなかった。

以上二回の空中戦について米軍は次の通り述べている。特攻体当りについては彼等の記述は一致する。  
(12月7日奉天第一次攻撃)

12月7日、第20爆撃コマンドは奉天の満洲飛行機製作会社を攻撃した。108機が予定通り離陸し、91機が奉天に到達した。同地上空は雲が全くなく、視界は無限であった。

しかし、猛烈な寒さの為窓が凍り、操縦者、爆撃手や射手には、非常な妨害になった。80機の爆撃機が20屯の爆弾を、目標地帯に撒布し、製造工場に若干の損害を与えたが、隣接の造兵廠の被害がもっと大きかった。別の10機の一編隊は過早に投降し、目標の手前九マイルの、鉄道操車場に命中させた。

日本軍機の邀撃はこの度も積極的で、B-29に対し延べ247回の攻撃を行

ない、三回の衝突が行なわれた。

その一回は故意でなく、日本軍戦闘機は墜落し、B-29はプロペラが曲っただけであった。

もう一回も故意ではなかったが、このときは双方とも墜落した。

あと一回は、損傷した戦闘機がB-29を道連れにしたのであって、これは計画的に衝突したように見えた。

日本軍機がしばしば用いる、空対空爆撃で、B-29に爆弾一発が命中したが、大した損害ではなく、燃えながらも頑張って全路を飛び、基地に帰着いた。

(12月21日奉天第二次攻撃)

12月21日には、49機のB-29が奉天に向い、うち40機が同地上空に到達したが、またも窓が凍った為、二編隊は大きな誤差を生じ、4、9マイルも過早に投降した。

日本軍は濃い煙幕を張り、飛行機工場を隠蔽したので、B-29はレーダー照準技術または補助技術によって爆撃した。所期の目標には全然効果がなく、造兵廠や鉄道操車場に僅かな損害を与えたのみであった。

日本軍の戦闘機は大挙して、真面目な攻撃をかけてきた。

空中衝突は二回生じ、一回は日本軍戦闘機とB-29双方とも墜落し、他の

一回は、日本軍戦闘機が衝突の企図を変えた一瞬後、B-29の翼を引っ掛けるのに失敗し、戦闘機だけが墜落した。なお他の一爆撃機には、敵の空対空爆弾が命中して墜落した。

「同徳台一期生会」より抜粋  
蘭花特別攻撃隊

松井 努 3-1 航

蘭の花は満洲国の国華であり、蘭華特別攻撃隊は我々日朝滿蒙露五族の空中勤務者全員が志願し、編成された特別攻撃隊であった。国軍航空部隊の真の姿であり、常に誇りと自信をもって一殺必墜の意気が昂んであった。昭和十九年十二月七日陸軍中尉春日園生はB-29迎撃戦闘において体当たりを取りし、続いて二週間後の十二月二十一日陸軍少尉西原盛雄(二期)並に陸軍少校松本太平が体当たり攻撃により壮烈な戦死を遂げ、三名ともに二階級特進の恩命に浴し軍神としての功績を讃えられたのである。満洲国航空隊の存在は、大東亜戦争の末期的症状の中で、満洲国民の上にはやが上にも認識されていった。

一回以外にB-29撃墜は容易ならぬことであった。しかし、体当たりそのものも口で言うことはたやすいが、精神力、体力、僥倖の極限で初めて完遂されることであり、その確率は極少であったと言えよう。

この考え方は、日ソ開戦により蘭花特別攻撃隊五十名の編成へとつながってゆく。この編成は関東軍の特命であり、その攻撃目標は戦車、船舶であり、関東軍にとって大きな脅威は、ソ連のスターリン戦車の出現であった。この戦車は昭和十九年東満洲国境正面に現れ、当時の貧弱な対戦車兵器ではこれを撃破することは不可能と判断された。これに対抗するにはカノン砲の水平射撃によるのみであり、それであれば飛行機もろとも敵戦車に体当たりして撃破する以外にないというのである。

航空隊司令部においてはこの特攻隊の編成を急いだ。名称はその名も床し蘭花特別攻撃隊であった。編成内容については知るよしもないが、私も、森正信も八月末出撃する手はずになっていたようだ。当然生還は期待出来ず、連日瞑想にふけていたような気がする。

幸か不幸か運命の日、八月十五日を迎え、何もかもが押し流されてしまった。

# 敵大型爆撃機に対し零戦の体当り

飯野 伴 七

この戦例の相手はB-24である。成都発のB-29が北九州を爆撃している頃の出来事なので、ここに掲載する。

大東亜戦争の初期から敵大型爆撃機B-17やB-24の要撃には、高々度、高速に加え、多数の塔載火器及び防護装置の為、我が戦闘機は大そう苦勞していた。

昭和19年10月21日、サイパンのアスリート飛行場を発進したB-24二八機が硫黄島に襲撃した。海軍252空、戦闘37分隊長中間栄博(海兵70期)は零戦九機を引連れ飛上った。そして体当り攻撃したのである。その状況について撃墜されたB-24の僚機で具に目撃したニューカム中尉の手記が、追憶の絵と共に、平成7年4月中間栄博大尉の弟中間明郎氏のもとに届いた。この件について零戦会の会報に出ているので、同会の投稿者香取頼男氏の下承を得てここに転載する。

(1) 第三十爆撃隊(B-24部隊)

同隊は、太平洋中部戦線を担当し、クエゼリン基地に展開していたが、昭和十九年八月末から九月初旬にかけて、占領したばかりのサイパン島のアスリート(ISELY No.1)飛行場に展開した。その後ISELY No.1はB-29が使用することとなり、B-24はISELY No.2を使用した。サイパン島にはもう一つの飛行場 KAGUMAN PT があったが、これはP-38隊が使用していた。



(注) 飛行場名はいずれも米軍がつけたものである。

サイパン島に展開当初は、硫黄島の偵察と、夜間妨害作戦を行った。夜間妨害とは、夜間の空襲により、地上の敵に安眠妨害と精神的不安を与えるものであった。

十月中旬に硫黄島に対する爆撃を開始した。因みに偵察飛行により作成した同島の航空写真を見せて貰ったが、極めて精密なものであった。

わが方の邀撃  
当時、硫黄島に進出していたのは、二五二空戦闘三一七飛行隊であり、中間大尉は同隊の分隊長であった。

日付	来襲機	邀撃機	指揮官
10月10日	B-24 一機	零戦九機	中間大尉
11日	B-24 一機	零戦八機	中間大尉
12日	B-24 二機	零戦七機	中間大尉
14日	B-24 一機	零戦四機	中間大尉
15日	B-24 二十七機	零戦十二機	中間大尉
21日	B-24 二十八機	零戦十機	中間大尉

(注) 一、十月二十一日以降の邀撃も行われているが省略する。  
二、十月十日以前の作戦記録が見つかからない。  
三、日、米両側の記録には二十一日の機数に若干の差がある。

各回の邀撃とも、三号爆弾を主用した攻撃をおこないB-24に若干の被害を与えたが撃墜することが出来なかった。ラボウルにおける空中戦以来、わ

が戦闘機隊は敵大型機(B-17、B-24)の撃墜に手を焼いていた。

十月の硫黄島から邀撃に上る零戦隊は、常に中間大尉が指揮官を引き受けていた。彼の烈々たる闘志のほどがうかがわれる。

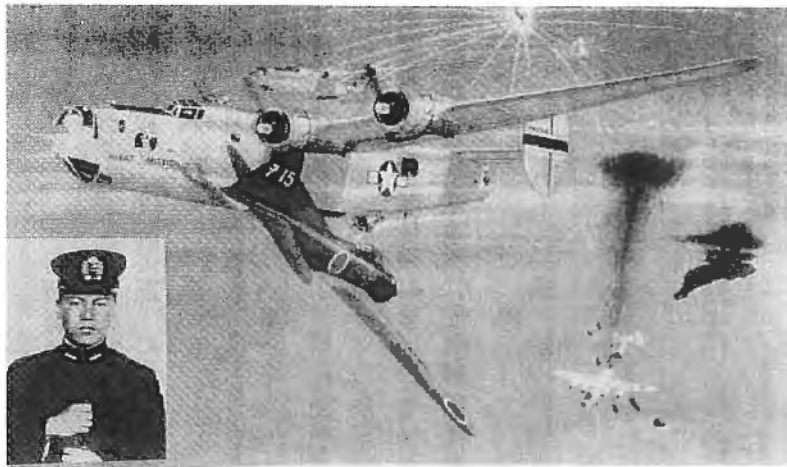
彼は、十五日の邀撃戦の際、B-24編隊からの十三耗銃弾を受け、飛行不能となり、南硫黄島に不時着(救援艇により収容される)をした。

(注) 三号爆弾とは、三十疋の小型爆弾で戦闘機に搭載し、大型機に対する攻撃に主として使用したものである。空中で爆発させ、その弾片で敵に被害を与えようとするものであったが、投下のタイミングを取る行動がむづかしく、成功例は少なかった。

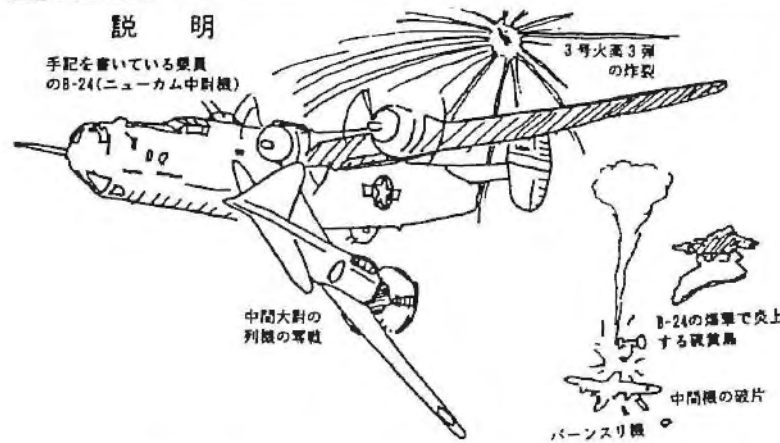
(3) 十月二十一日の体当り攻撃  
二十一日一〇五五硫黄島の電探が南南東一八〇軒に敵編隊を探知、一一〇〇中間大尉を指揮官とする零戦十機が邀撃に飛び上がった。

B-24、二十八機の大編隊は三機毎の編隊を組み、硫黄島の南々東方面から進入、飛行場への爆撃を行った。爆撃終了後、編隊は北西方向に避退し、左旋回でサイパン基地への帰投針路についた。その直後、高度を取り、攻撃態勢を整えた零戦隊がB-24編隊に対して三号爆弾を主として攻撃を開始し





中間栄博中佐



航空画家ジョンH. ハンドローサーによる画

た。十一時二十分であった。そのうち、バンスリー中尉機の直上に占位した中間機が直降下し、バンスリー機の胴体後部に撃突した。中間機はバラバラになって飛散し、バンスリー機は胴体後部がひきちぎられ、乗員二名は空中に投げ出され、他の乗員は機体とともに墜落、全乗員が戦死した。間もなく空中からバンスリー機の墜落海面に生じた白い波紋がはっきり

見えた。将に鬼神をも泣かしめる体当たりのシーンである。左掲の絵は、この体当たりの瞬間を復元して書いたものである。即ち、別のB-24の乗員が、目の前で起った体当たりの状況を現そうとして航空画家に書いて貰ったものである。その時の情景が真に迫り鬼気ただずむ感がある絵である。この乗員の手記があるので、この絵に加えておく。

私の手記 (B-24乗員)

一九四四年十月二十一日、サイパンから硫黄島に対する15回目作戦——(第52プラン "Night Mission") が行われた。第810、第392、第27爆撃飛行隊混成の34機のB-24 (バンスリー中尉のファイルには三二機となっている) が目標上空に進行した。

七機の零戦と他の一機に攻撃を受け、私は球型銃座から約200発発射したが一発も敵に命中しなかった。極めて近くで爆発した三号爆弾によるものと思われるが、わが機は垂直尾翼に穴が一つあき、アンテナ線が引きちぎられた。

三機の零戦がわが方の機銃によって撃墜され、他の一機はP-47によって撃墜された。このP-47は南硫黄島付近で我々に合同したものである。

爆撃終了後、編隊が南に向け旋回直後、第392飛行隊のロバート、バンスリーの操縦するB-24は、一機の零戦に体当たりされ、銅の中後部から半分にひき裂かれた。(生存者なし)

同時に、別の零戦が二発の三号爆弾を投下し、それがわが機の至近距離で爆発した。そしてその零戦はわが機の直上から垂直に降下してきた。

下部の球型銃座に配置された私は、機首銃座と上部銃座からの機銃の発射

音がよく聞こえた。さらにインターホーンを通じて操縦員ウイルトン・ニューカム中尉が零戦が我々に体当たりしようとしていると叫んでいるのが聞こえた。咄嗟にニューカムはその零戦をかわした。

その零戦の翼端は、機首銃座と二番エンジンの間を通り抜け、もう少しで体当たりするところであった。ニューカムは、零戦のパイロットのひきつった顔が今でも眼底に焼きついていて云っている。——零戦がすり抜けるその一瞬彼等の視線が合っていたからである。



B-24

### 第19回宝塚遺徳顕彰会慰霊祭

本年も7月7日(日)宝塚聖天の光明殿に於て「護国英霊」の慰霊祭が執り行われました。

昨年1月の近畿大震災で聖天様の本堂を始め附帯建物も大被害を受けましたが、皆様のご芳志により概ね修復され陸海軍のご遺族、地元の有力者を始め全国各地より関係戦友等三百名近くの方々が参集厳肅盛大に慰霊祭が奉修されました。

戦友を代表して特操一期の武田智様より概要左の様な追悼の辞が奉読され参列者一同深い感銘を受けました。

#### 追悼の辞(一部略)

歴史は百年を経なければ正鴻を期し難いと言はれて居りますがそろそろ歴史を見直さなくてはならない頃であると信じます。

極東軍事裁判に於て判事唯一人インドのパール博士は堂々と日本の無罪と正当性の主張され、又マッカーサー將軍も日本が開戦を決断したのは、全く自衛のためであり極東軍事裁判は誤りであったと述べられ米國が仕掛けた戦争であったと発表しているのに、日本人は自分等の子弟に日本は犯罪を犯したのだ。日本は侵略の暴挙を敢てし

たのだと教えている。又日本の政治屋はアジアの諸國に対して何故お詫びばかりするのか。何故サムライらしく毅然としないのか。日本ぐらいいアジアのため尽くした國はないのに、日本の政治家が相手國の言葉のままに肯定しパプロフの犬のように同じ言葉でお詫びする。日本人はすっかり変わってしまったと思えますとマレーシヤの元外相の方が申されている。又石油資源の多いインドネシヤを植民地としていたオランダでは、日本は先の大戦で敗れたが、勝った私共オランダは植民地を失い大敗した。日本はアジア各地で侵略戦争を起して申訳けないと自分をさ



げずみ、ペコペコ謝罪しているが、逆に日本の功績は偉大であると述べているのです。これは日本傷痍軍人会代表がオランダを親善訪問した折、同國の傷痍軍人代表と共に市長主催の親善パーティに招待された時のアムステルダム市長の歓迎挨拶の一節でありま

### 原町戦没者慰霊祭

平成8年9月22日第26回原町飛行場関係戦没者28柱と第17回大東亜戦争地元戦没者48柱の合同慰霊祭が原町陣ヶ崎公園墓地で執り行われた。伊勢大御神宮司森鎮雄(陸士58期)の祝詞奏上に始まり、原町市長、参議院議員板垣正、商工会議所会頭、航空碑奉賛同人会佐藤重由、福島県僧行会長角田雄三、特攻戦没者慰霊財団最上貞雄、県遺族会々々長庄島キミ子等の諸氏の切々の胸を打つ追悼の辞が述べられ参列者一同往時を偲び感銘深く在天の英霊のご冥福を祈った。

唯当日は生憎台風17号に打たれ、特に後半より大変な豪雨と強風で一同びしょ濡れ、生花は倒れるしマイクは不調となり、八牧事務局長以下世話の方々は大変であった。

私共生存者は、今後の同胞のために、大東亜戦争の中に生きた人間として悪い事、善い事、すべて含めて正しい史実を後世に伝えることを勇士の御霊の御前でお誓い致し、追悼の辞と致します。(最上理事長記)

終了後常磐線は14時の上りスーパーひたちは定刻発車したが、日立の手前で立往生7時間以上も車中に、とめられ、とうとう勝田で打切りとなり臨時普通電車で明け方4時近く上野到着、又下り仙台行きも連休となり原町に戻り旅館に宿泊したが満室のため一部の人は宴会場でざこ寝をされた由、ご遺族は九州から何人が見え北海道よりも居られ帰途は大変であったと思われるが、台風の中での慰霊祭は其れだけに忘れられない慰霊祭となった。(最上記)

